

「第20回日本臨床環境医学会学術集会シンポジウム」

(臨床環境21:171, 2012)

座長からのひとこと

— 生活習慣病としての歯周病 —

佐藤 勉

日本歯科大学東京短期大学

口腔領域の二大疾患は齲蝕と歯周病である。近年、わが国における齲蝕の有病率は減少傾向にあるが、歯周病のそれは極めて高い数字となっている。また若年者においても歯周組織に炎症がある者が増加しており、歯周病対策は全てのライフステージにおいて重要な課題となっている。歯周病は口腔に生息する歯周病原性細菌による感染症であるが、その発症や進行にはさまざまな生活習慣が関与している。すなわち歯周病は感染症と生活習慣病の両面をもった疾患と言える。近年、歯周病は単に口腔局所のみならず、全身の健康状態とも密接に関連することが明らかになってきた。その詳細な機構は未だ不明な点も少なくないが、医科領域と歯科領域の共同研究も数多く行われており、歯周病が糖尿病や心疾患などの全身疾患と密接に関連するとのエビデンスが多数報告されてい

る。歯周病と生活習慣との関連では、喫煙が最大のリスク要因と考えられており、歯周組織への障害作用についてかなり明らかになってきている。わが国における喫煙率は先進国において決して低くなく、肺癌予防はもちろんのこと、歯周病予防の面からもその対策は重要である。一般に国民は齲蝕や歯周病などの口腔疾患を軽視する傾向にある。しかし、上述のように歯周病予防は口腔のみならず全身の健康の保持・増進に極めて大切と言える。「21世紀における国民健康づくり運動(健康日本21)」では、さまざまな生活習慣病対策が示されており、喫煙と共に歯・口腔についてもその健康に関する生活習慣および社会環境の改善が掲げられている。そこで、本シンポジウムでは歯周病の発症や進行に関わる要因・生活習慣について解説することとした。